

／ 私たちが聞きました ／



mundi特別企画

私立玉川聖学院高等部3年
藤林彩乃

(ふじばやし・あやの)さん

「将来的に区議会議員になり、課題を挙げて世の中に訴えたいと思っています。みなさんとお話ししてさらにその気持ちが強くなりました」

中高生の私たちから質問です!

イベント終了後にオンラインでつなぎ、「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2020」で最優秀賞を受賞したふたりからイベント登壇者に聞きたいことを自由に質問してもらった。

名古屋市立汐路中学校3年
大石 理紗子

(おおいし・りさこ)さん

「みなさんの話を聞いて小さな力の積み重ねが大切だと気づきました。自分のできることから小さな発信を続けていきたいと強く思っています」

Question
藤林さん

私は今回、「世界の生理事情」をテーマにエッセイを書きました。そこにもつながるのですが、私は将来的に保健体育の授業を男女共同にするべきだと思っています。男性と女性で分けて教育を受けることで生理のことをタブー視されてしまったり、間違った知識を植えつけてしまったりする可能性があると思うからです。その点について男性からの意見をお聞きしたいです。

Answer: 昇吉さん

これは、タブー視されている雰囲気改善によって社会的な不合理を解消していこうという話ですね。そのためには授業と一緒に受けるだけでなく、もっと話し合うなどおたがいの理解を深めていく機会を増やすことが大切かもしれないですね。

Answer: 清水さん

賛成です。女性について理解を深めることにつながるので、子どもの頃から男性の女性に対する思いやりが育つと思います。男性側の恥ずかしさがなくなるとおたがいの関係性もどんどんよくなるのではないかと思います。

Question
大石さん

私は支援活動として日本で募金やエコキャップ運動ぐらいしかできていないのですが、途上国の人のために日本でできることはほかに何かありますか?

Answer: ヤマザキさん

なんでもできると思います。ただ、海外ばかりに目を向けるのではなく、まずは日本で助けを必要としている周りの人々に対してどういう手を差し伸べることができるのかを考えるのがいいのかなと思います。そうして考え、行動していくことが次第に海外の人にとっても役立つことにつながっていくのかなと思います。

Answer: 桜木さん

大石さんの話を聞いて自分の10代の頃を思い出しました。私も自分に何ができるんだろうと考えていた時期があったんですね。まずは、国や地域の人たちのことを知ること。それが相手にとって何が必要なのかを知ることにつながります。そのうえで、自分が等身大で無理せずにできることを探してみるのがいちばんシンプルな手順だと思います。

Answer: 昇吉さん

広い世界の中で自分は小さなことしかできないと思わないで、小さなことでも恥ずかしがったり、気負ったりせずにやり続けていくことが大切だと思います。大石さんがいま行っていることが習慣になれば、さらに意識が変わっていくと思いますよ。

Answer: 清水さん

募金など大石さんはすでに周りの人を巻き込み、大きなことに取り組んでいます。問題を知ること、伝えることが大切で、そして発信していくことで、大人や力のある人たちが助けてくれることがあります。続けていくことが大きな力になると思います。

発信し続ける大切さ

2005年、大地震に襲われたパキスタンの子どもたちが青空教室で勉強している様子や、再建された校舎で学ぶ様子を切り取った清水さんの写真紹介の際は、昇吉さんから「地震から15年が経っても多くの学校の再建が進んでいないのはどうしてなんですか?」という質問が出た。「理由をよく聞かれるのですが、なぜと考えていても先に進まないと思うんです。目の前に子どもたちがいて、校舎を必要としている事実がある。僕たちはそれを解決するために活動しているだけなんです」と清水さん。この言葉を受けて「原因にたどり着けないこともあるんですよ。私たちには見えない、計り知れないような事情が後ろで動いている場合もありますから、それをどうしようと考えようより、先にとり進んでいかなければいけないこともあります」と、ヤマザキさんはまず行動することの大切さを説いた。



「一枚の写真を通してほかの誰かの存在を知り、人と出会う喜びを再認識できる力が写真にはあると思っています」と桜木さん。スマートフォンでの撮影など身近にもある写真が持つ力についてあらためて気づき、途上国が抱える課題だけでなく、希望も感じることができた時間となった。



を説いた。

さらに話は、パキスタンの女性の就学率の低さから世界のジェンダー格差の問題の話へ。ヤマザキさんは、「イスラム諸国やアフリカでは顕著な問題です。結婚が就職ととらえられていて、実はわれわれ日本人も昭和初期ぐらいまではそうだった。時間とともに新しい思想が入っていくなかで少しずつ改善されていくんです。私たちも感じたことをたくさん発言する場をたくさん持つことが少なからず(問題解決に)効果をもたらすのではないかと思います」と話した。速い国のことであっても、写真だから伝えられることがある。

*2 詳細はp.10~13を参照。

「輪になって語ろう。地球の未来。EARTH CAMP」イベントレポート

一枚の写真が開く世界の扉

オンラインの国際協力キャンペーン「輪になって語ろう。地球の未来。EARTH CAMP」のメインイベントで、本誌企画「地球ギャラリー」から生まれたトークイベントが開催された。

文●坪根育美 写真●小島 沙緒理

春風亭 昇吉(しゅんぷうていしやうきち)さん

落語家。岡山県出身。2007年に東京大学経済学部を卒業後、春風亭昇太に入門。落語での活動のほか、経済番組のMCやバラエティ番組への出演、また気象予報士としてもテレビなどで幅広く活躍中。21年5月、真打に昇進する。

ヤマザキマリさん

漫画家・文筆家。p.03を参照。

桜木 奈央子(さくらぎ・なほこ)さん

写真家。p.09を参照。

清水 匡(しみず・きょう)さん

NGO国境なき子どもたち職員兼人道写真家。p.12を参照。



トークイベントの様子は
こちらから視聴できます!
(2022年1月末まで公開予定)



写真から背景を知る

JICA、外務省、国際協力NGOセンター(JANIC)の共催によるオンラインの国際協力キャンペーン「輪になって語ろう。地球の未来。EARTH CAMP」のメインイベントが

2021年1月30日と31日に開催された。国際協力の日である昨年10月6日から始まったEARTH CAMPは21年3月末までの予定で、コロナ禍下においても「世界はつながっている」というメッセージを、国際協力・交流に関するオンラインイベントなどを通じて発信している。

31日には、「地球ギャラリー」でも作品を掲載している写真家の桜木奈央子さんと清水匡さん、ふたりと同様に国内外で思いを伝える仕事をしている漫画家のヤマザキマリさんをゲストに迎え、落語家の春風亭昇吉さんが司会進行を務めた「地球ギャラリー」写真で旅する世界「フライング」越しの途上国」と題したトークイベントが開催された。「表現者」という共通点がある4人。今回のイベントは、桜木さんと清水さんがそれぞれ活動している地域の様子についての話をはじめ、ヤマザキさんの海外生活での経験や知見、洞察に基づき至言が満載の内容となった。



トークは「ウガンダは第二の故郷」と話す桜木さんの写真紹介からスタート。桜木さんは、内戦からの復興の過程を見てきた同国について話をしながら「12年越しの結婚式」と名づけた写真について「結婚式で集まったみんなが平和っていいねと言っていました。平和というものは戦争を体験していない人にとってはあたりまえでふだん意識しませんが、こういう写真や写真の背景にある状況を知ること、平和はあたりまえでないということを感じてもらえたらうれしいです」と、そこに込めた願いを伝えた。またパキスタンなどの国で撮影を続けている清水さんは、「抱える背景は想像できないくらいいろいろなものがあるが、実際に接してみると子どもたちは笑ったり、がんばっている姿を見せたりしてくれる。それを見ると子どもらしさに国境はないな、みんな同じなんだと感じます」と、これまでに会って来た子どもたちの印象について教えてくれた。



*1 詳細はp.04~09を参照。